

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370207

研究課題名(和文) 近世近代の枠を越えた十九世紀絵入小説史を記述するための書誌学的研究

研究課題名(英文) Beyond the Early Modern - Modern Divide: A Bibliographic Approach to the Illustrated Fiction of Japan's Nineteenth Century

研究代表者

高木 元 (TAKAGI, Gen)

大妻女子大学・文学部・教授

研究者番号：00226747

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：従来は必ずしも明らかでは無かった幕末から明治初期にかけての草双紙を中心とする絵入小説の様相に関して、その全体像を概観できる程度までは資料を整備できた。今後の叩き台として明治期草双紙の書目を公開する予定である。

一方、十九世紀前半に出板された「読本」に関しては、フランスのギメ東洋美術館で読本の口絵挿絵だけを蒐めて合冊した大量の資料を見出すことが出来、十九世紀末に貸本屋での役割を終えた絵入読本の末路の一端を明らかに出来た。欧羅巴で沸き起こったジャポニズムの隆興に乗じて、絵入読本の絵だけが輸出されたものであると思われる。

つまり日本十九世紀小説は絵入であったが故に国外で享受されるに至ったのである。

研究成果の概要(英文)：Over the course of research supported by this funding, I have assembled materials that provide for an overall view of the forms of illustrated fiction from the Bakumatsu to early Meiji periods, focusing on the genre of kusazoushi, the history of which remains understudied at present.

Additionally, in regards to the genre of yomihon that was published in the early nineteenth century, I have discovered an enormous amount of material at the Musee Guimet in France in which only the illustrations of yomihon were collected and bound into scrapbooks and thus revealed one unknown terminus at the end of the nineteenth century for these illustrated books that had circulated in Japanese lending libraries. These illustrations, cut out from books, appear to have been exported to Europe during the heyday of Western Japonism.

研究分野：十九世紀日本小説

キーワード：国文学 十九世紀小説 絵入本 草双紙 読本

1. 研究開始当初の背景

本課題は2010～2013年に採択された研究課題「近世近代を通貫する十九世紀小説史の構築へ向けた〈絵入小説〉の書誌学的研究」を遂行中に、新たに調査すべき資料群を発見したことにより、最終年度前年申請に応募して採択されたものである。したがって、以下の記述は、基本的には前課題の研究目的や研究方法を継承したものである。

さて、日本文学史における時代区分は、明治以降を「近代」、それ以前を「古典（前近代）」としてきた。この区分は明治維新という国家統治機構の変化に即したものであって、必ずしも文学史の実態を反映したものとはいえない。にもかかわらず、困ったことに学校の国語教育を初めとし、日本文学研究の学界に於いては、依然としてこの時代区分が通用している。

幕末維新时期は、折しも印刷技術が製版（木板）から活版（金属活字）へと緩やかに変化しつつある時期でもあった。メディアとしての書物も、その形態や機能を変化させつつあり、文学もこれらメディアの変化に伴って変容していったのであるが、メディアの変遷を踏まえて構想された文学史は、未だ記述されていないといっても過言ではない。

外国文学史や日本の美術史の分野に於いても、世紀に拠る区切が一般的である。ならば、日本文学史に於いても、幕末維新时期を一括りにして十九世紀文学史として捉え直すことに拠り、より一貫した実態に即した文学史が描けると思われる。

2. 研究の目的

幕末から明治初期は、出板（出版）メディアが製版から活版へと緩やかに且つ大きく変貌を遂げた時期である。我国における小説史に見られる大きな特徴の一つである〈絵入本〉に注目すると、活版本が普及するにつれて絵が少なくなっていく現象に気が付く。画像の製版技術が未分化だったからである。

近世小説にとって本文に入れられた画図は単なる添え物ではなく、欠くべからざるテキストの一部であった。すなわち活字本が普及したことに拠って、本質的にテキストの性格が変容してしまったのである。

つまり、この時期のメディアにおける出版と享受との様相を注意深く跡付ければ、近世と近代とを単純に劃期出来ないことが実証できるはずである。

前近代（近世）から近代へという発展史観的な文学史の把握を相対化すべく、幕末維新时期に出板され享受されたにもかかわらず、従来の文学史では等閑に付されて真面に扱われなかった絵入戯作類に着目し、それらの標目を蒐集調査し絵入戯作の網羅的書誌調査を通じて書目作成を試みる。そしてその分析を通じて、近世末期と明治初期とを十九世紀

という枠組みにより括って捉え直した新たな日本文学史を記述することが可能になるのである。

3. 研究の方法

十九世紀末の絵入小説に関する可能な限り網羅的な書誌調査を通じて、出板流通享受の諸相を明らかにすべく、その所在情報を記した基礎的な書目を整備作成する。

絵入小説として流通し享受された従来の文学史では扱われることの無かったカテゴリーである切附本や絵本（特に合羽摺絵本）等は資料の所在情報すら知られていないので、在外資料をも含めて此等の博捜に努める。

とりわけ近世末期に草双紙と同じ体裁で出された切附本は、一部全丁絵入りのものを含んでいる。此等は明治期草双紙の体裁を先取りした物として位置付けられるので、更新を続けている切附本の書目に所謂絵本を含めて整備し直す。

近世末期に刊行された絵入読本は貸本屋にとって不可欠な必備書であった為に、明治期に至るまで後摺本が刊行され続けていた。と同時に、近世後期に刊行された草双紙の長編ものは明治期に至っても続いて刊行されていた。従来の書誌学では初版初摺本の探求に偏していた為に等閑に付されていた後摺本に関する書誌調査をして、明治期における享受の様相を明らかにする。

明治期草双紙と密接な関係を持つ「有喜世新聞」「魁新聞」などの小新聞は、纏めて所蔵している機関が少なく、その全体像は必ずしも明らかにされていない。そこで管見の及ばなかった日付の新聞の博捜に努めたい。

上方に多いと思われる合羽摺絵本についての調査蒐集に努める。と同時にこの時期には〈百人一首もの〉〈英雄絵本〉〈戊辰戦争もの〉などの出版物も少なくないので、これら消費されて残存することの少なかった分野の資料について、可能な限り所在情報を博捜して書誌データの収集をしたい。

4. 研究成果

(1) 切附本に関しては四十年に渉って蒐集に努めてきた。ほぼその全貌を把握できるだけの資料を整備できたが、今でも未見資料に出合うことがある。架蔵資料に関しては立命館大学アトリーサーチセンターの「古典籍ポータルデータベース」

http://www.dh-jac.net/db1/books/search_portal.phpにて、架蔵本全冊全丁の画像データを公開していただいております。新収資料についても暫時追加公開している。

(2) 読本に関しては、いまだ完全には調査が終了していないので、拙サイトで以下の項目を立てて限定的な公開をしている。番号：内題：訓み：巻冊：書型：表紙：題簽：見返：

前付：匡郭：丁付：後付：作者：画工：彫工：
筆耕：刊記：広告：成立：典拠：諸本：備考：
二〇〇九年以来 Wiki という web データベースシステムに乗せており、閲覧者に拠るデータの修正加工が可能にしてあるので、随時の更新が行われつつある。近い将来、一般に公開する予定である。

(3) 予想外のことであったが、明治期に入ってから絵入読本末路の一端を明らかに出来たのは大きな成果であった。

フランスのギメ東洋美術館の図書室に、読本の挿絵だけを集めて合冊した大量の資料群を見出すことができたのである。エミール・ギメが来日して読本の挿絵の価値を見出し、購入して帰国したことが契機となったと思われ、その後、十九世紀末に日本で店仕舞いした貸本屋での役割を終えた絵入読本が、古美術商たちの手に拠って欧羅巴に渡ってオークションで売り立てられたものと思われる。

絵入読本の口絵や挿絵を描いたのが浮世絵師であったことと相俟って、折しもヨーロッパで沸き起こったジャポニズムの隆興に乗じて、絵入本の絵だけを抜粋して輸出されたのであろう。つまり、十九世紀の絵入本は、国外でも享受されるに至った事が明らかになったのである。

この発見については、「西日本新聞」(二〇一四年八月十三日朝刊、文化欄)に「パリに渡った和木たち」という拙稿が掲載され、また、ギメ東洋美術館における国際ワークショップ「和古書の世界」(二〇一七年二月二三日)で発表した。

(4) 明治期草双紙については、主として三十歳で若死にしたという岡本起泉(岡本勘造)が係わったものについて調査した。投書家として出発して「東京魁新聞」(後に「東京新聞」と改題)の編集長を経て「有喜世新聞」印刷長となり「諸藝新聞」を創刊し、仮名垣・柳亭・為永派に属さなかった作家として新聞記事に基づく戯作を〈明治期草双紙〉として出し続けた点は興味深い。おそらく、板元である島鮮堂(綱島亀吉)の主導によって実現したものと思われる。

『夜嵐阿衣花廻仇夢』(全五編、明十一・六、孟斎画)、『其名も高橋毒婦の小傳・東京奇聞』(全七編、明十二・二、房種画)、『澤村田之助曙草紙』(全五編、明十三・七、周延画)などに関する研究は既に備わっているが、○『嶋田一郎梅雨日記』(全五編、明十二・六、房種画)○『白菖阿繁顛末』(全三編、明十三・辰春、周延画)○『坂東彦三倭一流』(全三編、明十三・四、周延画、春濤閣)○『幻阿竹噂聞書』(全三編、明十四・一、房種画)○『川上行義復讐新話』(全二編、明十四・一、春濤閣、周延画)○『色吉原盛糸柄襦』(全三編、明十四・五、國松画)○『東京に開き横濱に薫る・花岡奇縁譚』(全三編、明十五・二、國松画)

○『恨瀬戸恋神奈川』(全二編、明十五・二、國松画)○『思案橋暁天奇聞』(全二編、明十五・二、俊雄閣、國松画)○『娘浄瑠璃噂大寄』(初編、明十五・三、俊雄閣、國松画)などについては、調査研究が進捗していなかったもので、これらの明治期草双紙が原拠とした事件の記載がある新聞について調査した。「有喜世新聞」などは全貌を明らかに出来たが、「魁新聞」などは揃って所蔵している機関を見付けることが出来ず、今後の課題として残ってしまった。

(5) 主として上方で出版された合羽摺絵本は二代目長谷川小信のものがシリーズで出されたようであるが、一部分しか管見に入らなかった。板元も綿屋喜兵衛(前田喜兵衛)板が多いようである。以前紹介した『里見八犬伝』は架蔵版と林美一旧蔵本とを比較すると、摺られた時期が異なるので色が相違するのは当然として一部型紙も作り直しているようである。また、軍談ものなどにも合羽摺の挿絵が入れられたものが見られる。これらの全体像を明らかに出来る程度の書目作成にも、今後の調査継続が必要であり、より一層博搜に努めたい。

(6) 以上の各ジャンルに及ぶ書目を統合して、最終的には絵入本書目として公表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計11件)

① 高木元、魯文の報条(一)、大妻国文、第48号、査読無、2017、pp.69-88、大妻女子大学機関リポジトリ
<https://otsuma.repo.nii.ac.jp/>

② 高木元、『貞操婦女八賢誌』一解題と翻刻一(一)、大妻女子大学紀要一文系一、第49号、査読無、2017、pp.67-102、大妻女子大学機関リポジトリ
<https://otsuma.repo.nii.ac.jp/>

③ 高木元、魯文の滑稽本、日本文学、65巻10号、査読有、2016、pp.31-41、

④ 高木元、魯文の〈填詞〉、大妻国文、第47号、査読無、2016、pp.125-144、大妻女子大学機関リポジトリ
<https://otsuma.repo.nii.ac.jp/>

⑤ 高木元、魯文の『忠臣蔵』、大妻女子大学紀要一文系一、第48号、査読無、2016、pp.77-92、大妻女子大学機関リポジトリ
<https://otsuma.repo.nii.ac.jp/>

⑥ 高木元、十九世紀の絵入メディアー錦絵の〈填詞〉をめぐってー、國語と國文學、1095号、査読有、2015、pp. 3-20、

⑦ 高木元、ギメ美術館蔵〔読本挿絵集〕について、語文論叢、29号、査読無、2014、pp. 8-16、
国立大学法人千葉大学機関リポジトリ
http://mitizane.11.chiba-u.jp/metadb/up/AA12576416/gobun29_takagi.pdf

⑧ 高木元、江戸読本の往方ー巴里に眠る読本たちー、読本研究新集、第6集、査読有、2014、pp. 169-181、

⑨ 高木元、書物(テキスト)のリテラシー、日本文学、62巻4号、査読有、2013、pp. 10-22、

〔学会発表〕(計1件)

① 高木元、江戸読本ーギメ東洋美術館図書室所蔵日本19世紀伝奇小説をめぐってー、ワークショップ「和古書の世界」、2017年2月23日、フランス国立ギメ東洋美術館(パリ)

〔図書〕(計2件)

① 青葉ことばの会編、おうふう、日本語研究法【近代語編】、2016、227p. 〈共著〉高木元「付録3『浮雲』書誌」pp. 196-213

② 林洋子／クリストフ・マルケ編、勉誠出版、テキストとイメージを編むー出版文化の日仏交流ー、2015、335p. 〈共著〉高木元「十九世紀における日本の出板文化」pp. 47-72

〔その他〕

ホームページ等

個人アーカイヴ「ふみくら」

<http://www.fumikura.net>

拙サイトで上記のほぼ全ての業績を公開している。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高木 元 (TAKAGI, Gen)

大妻女子大学・文学部・教授

研究者番号：00226747